

わたしの聖戦

◎◎女性が働くところ◎◎◎◎80

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

感染症と日本人

春先からはじまったインフルエンザ騒動は、少しあきれるくらいの過熱ぶりであった。それほど毒性は強くないことがほぼわかって以後も、過剰反応ではないかと思う報道が目立つ。秋には、いや夏にも強毒性のウィルスが蔓延する恐れがある

：と、火種は結構根強く残っている。季節性のインフルエンザと違い、今回は「新型」と冠がついていることで、一層マスクの興味を誘い、人々の恐怖を煽っている気がする。

インフルエンザの歴史は古く、古代ギリシアの医者ヒポクラテスが、「高熱を発し、震えがくる病

が流行った」と記述したのは紀元前412年のことである。

海に囲まれた島国であるせいから、我々は感染症への対応が妙に苦手である。少し前のエイズでも同様の雰囲気があったし、その前のハンセン病も

：と、火種は結構根強く残っている。季節性のインフルエンザと違い、今回は「新型」と冠がついていることで、一層マスクの興味を誘い、人々の恐怖を煽っている気がする。いかに本来的に我々は無垢な存在であり、悪いものは皆海外から侵入してくるものであり、いつでも間違いなく自分たちは被害者なのだという

自信に満ちあふれている。そこには、かつてそれまでの感染症への差別や偏見がもたらした悲劇への反省はみじんも感じられない。ハンセン病患者に對する、国をあげての悲惨な対応と苦い経験はどこに生かされているのだろうか。

「上陸」とか「水際対策」



たとえば、弥生時代に大陸から輸入されたといわれる結核。いうまでもなくかつて結核は日本の国民病であったが、環境の整備や抗生物質などの複合的効果によって、今やほとんど忘れ去られた病気になった。しかし、ではまったくゼロかとい

えば、それはとんでもない誤解であり、新規に結核患者として登録される患者数は1年で3万人前後にのぼることがわかっている。その数字は、1年間の自殺者数に匹敵するものである。

しかも、たまたま今回のインフルエンザ騒動の直前に結核と診断された芸人がいたが、その扱われ方はインフルエンザとは比べものにならないほどに軽かった。思うに、欧米諸国から「結核大国」との汚名をきせられている立場として、世界中で流行を見せたインフルエンザに対しては、我が国はこれほどまでにしっかりと対策ができていくという対外的ポーズの意味合いが大きかった気がする。明治時代に、欧米列強国に負けないよう、他国の目を常に気にして行動していたかつての日本と何ら変わらないように見える。

ちなみに、胃がんの一要因といわれるヘリコバクターピロリ菌は6万年前から生存し、梅毒トレポネーマの存在は旧石器から、という説もある。人間は、菌やウイルスたちとは、淘汰も含めた共存という関係性にあるのだというのには、間違いないところだろう。

インフルエンザのみならず、未知の菌やウイルスが猛威をふるう可能性はいつでもある。彼らは常に新しい顔つきで我々の前に現れ、生命活動を脅かしつつ、地球に生きてきた歴史を刻んでいくのである。

では、ヒトはどうやって彼らとうまくつきあっていくのか？――残念ながら、そこに不可欠なはずの「生と死」への思索が決定的に欠けているために、その答えを見出すには程遠いところに我々はいらぬのだと思う。

イラスト・三浦義雄